

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年七月二十九日(土曜日)午後六時三十分開演

演目解説 (金沢能楽美術館学芸員 山内 麻衣子)

狂言 蝸牛(かぎゅう)

藪に居て頭が黒く、腰には貝を着け、折々は角を出す。それが蝸牛というもの。主人の祖父の寿命長遠のため、取って来いと命じられた太郎冠者は、藪に眠る山伏を見つけて早合点。山伏の頭には黒い兜巾とぎんが乗り、腰には法螺貝ほら、篠懸すずかけも角に見えます。生身しょうじんの蝸牛を連れ帰る際には、「でんでんむしむし」の囃子物に自然と心身が浮かれます。迎えに出た主人に叱られますが、冠者も主人も観客も、囃子物の魅力には抗しがたいものです。

能 弓八幡(ゆみやわた)

如月初卯きんげつしげはつの日、後宇多院に仕える臣下たち(ワキ・ワキツレ)が宣旨せんじにより男山石清水八幡に参詣まじりします。御神事おみじんじの野曲えいさよく(神楽)に陪従べいじゆう(楽人)として加わるためです。そこへ老若二人の参詣人(前シテ・ツレ)が来合わせて、治まる御代と君を守る神を称えかつ祝います。翁が錦の袋に入れた弓を持つわけを尋ねると、翁は勅使を待つて君に捧げ物をすると言います。桑の弓と蓬よもぎの矢は神代・周朝から、それを袋に収めることが天下泰平の瑞相とされます。それを君に捧げようという八幡大菩薩の神託でした。翁はさらに詳しく八幡神の宇佐から男山への遷座や神功皇后じんぐうこうごう由来の神祭のいわれを述べて、自らを高良かむらの神と名乗り、神託を疑うなかれと言い置いて消え失せます(中入)。山には音楽が聞こえ異香いきかうが薫るなか、奇特きとくを待つ臣下たちの前に再び高良の神が今度は颯爽さつそうとした男体(後シテ)で影向ようこうし、夜神楽に興じて神楽を舞い、君の御代を守る八幡の神徳を称えます。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(老翁) 尉髪をつけ、小尉の面をかける。

後シテ(高良の神) 黒垂をつけ、色鉢巻をしめ、透冠をいただき、邯鄲男の面をかける。 終了予定 午後八時十五分頃